

ひどい雨音が響く中、スミレの部屋の前へ行く。 朝にはなかったタオルとトレーが出されていた。 起きたのだろうか、ノックをし、声をかける。

「スミレ、起きていますか?」

「ああ」

「おはようございます」

「……おはよう」

「ご飯食べてくれたんですね」

「君があんなことを言うから」

「やっぱり毒の心配をしていたんですか?」

「だって、僕にこうしてくれる理由がわからない」

「言ったじゃないですか。けが人を放っておけないだけで すよ |

「本当にそうなんだね」

「はい」

「おせっかいだ」

「自分でもそう思ってます」

扉越しで、スミレが少しだけ笑ったような気がした。

「雨、止みませんね。**麓**へおりた日に聞いたのですが、この地域はほとんど雨が降らないそうです」

「こんなに雨が降るのは珍しいってことか」

「そうですね。そちらの部屋は雨漏りしてないですか?」







「問題ないよ」

「よかった。寒くはないですか?」

「上掛けを用意してくれただろう」

「使ってくれてるんですね」

「……これだけの雨じゃ、マリーが言ってた流星群は見れないね」

わざと話題を変えたのだろうか。 スミレの照れ隠しが見えた気がして、少し笑ってしまう。

「流星群、残念ですね。見てみたいんだけどな」

「マリーも見たことない?」

「はい。知識として知っているだけで、実際にはないんです」

「そっか」

「流れ星に願い事をすると叶うっていうお話は知っていま すか?」

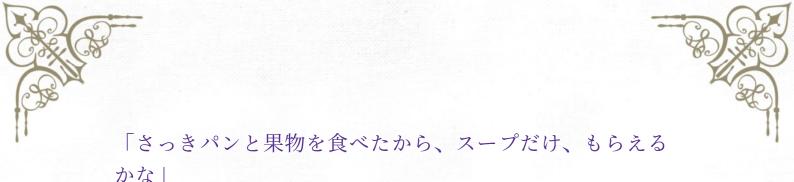
「うん」

「スミレなら、なにをお願いしますか?」



「それじゃあ、そろそろご飯を作りますね。スミレも食べますか?」





「もちろんです! 待っててくださいね」

調理台へ行き、昨日作ったスープを温めると、いつものように扉の前に置いた。

「お待たせしました。私はロフトにいますから、なにかあれば呼んでくださいね。雨の音がすごいけど、聞こえると思います」

「わかった」

「星は見えませんけど、スミレの願い事が叶うといいですね」

自分用にパンを切り、スープと一緒に持ってロフトへあがる。

スミレとの会話が少し増えた気がして、うれしかった。 ご飯を食べながら本を読んでいたら眠くなってきたので、 少しだけうたた寝することにした。

その日の夜。

地面が揺れていることに気づいた。 そのあとすぐ、ガラガラという大きな音が周囲に響く。







音に驚いたのか、マリーが駆け足で階段をおりてくる音がする。

「スミレ、さっきの音、なんでしょうか」

彼女がノックもせずに話しかけてくるのは、はじめてだった。

「大雨のせいで、山が崩れたのかもしれない。家は平 気?」

「……はい、大丈夫そうです。あの、」

「なに?」

「今日はここで寝てもいいですか?」

「そこにベッドがあるの?」

「ない、ですけど」

「床で寝るつもり?」

「ええと、その……、こわくて」

「顔も見たことない男のほうが、よっぽどこわいだろ」

「そんなことないです。スミレとは何度も話してますし、

一人より、誰かの傍のほうが安心できます」

「扉越しでも?」

「扉越しでも、です」

「君がそうしたいなら、すればいい」

「はい」

そのあとに続く言葉はなかった。





僕もなんとなく扉まで寄り、背を預けて眠りについた。



